

メルロ＝ポンティにおける感性的なものとロゴス

三宅萌

はじめに

20世紀フランスの現象学者モーリス・メルロ＝ポンティ（1908-1961）がしばしば芸術に言及していたことは広く知られている。1959年に開始されたコレージュ・ド・フランスでの講義録によれば、古典的な哲学は同時代的な人間の状態によって「破壊」⁽¹⁾されるものである。こうした危機に際し改めて我々の現在を正確に捉え、新たな現実を作り上げていくために、芸術が呼び出される。メルロ＝ポンティにおいて哲学と芸術とは、従来の思想・表現的伝統において未だ名指されていないものを感性的なものを通して開示・表現・伝達するという点でその方向性を共有する。これは意味の生成であるが、Benoistが指摘するように、感性的なものそれ自体が主体となるような「ロゴスの生成」⁽²⁾だと言ってよい。

ところで、このロゴスと感性的なものとの往還という問題系はフッサールが『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』補遺、通称「幾何学の起源」で提示したものである。フッサールは知的理念の範型として幾何学を取り上げながら、その伝統の継承を、打ち立てられた幾何学という理念（「明証性」）の圏域と、それを定着させ共同体内で継承していくための文字資料という感性的なものの圏域との往還運動を要求するものとして提示する。というのも、最初の幾何学者が「原的明証」を表現した幾何学の成果は、感性的な文字資料において伝達されるうちにその明証性が失われ自明視されてしまう（「沈殿」、意味の「空洞化」）。この沈殿した幾何学の明証性を、改めて生き生きとしたものとして再現する（「再活性化」）能力の伝達と継承とが、幾何学を同時代の危機から救うために重要であるとフッサールは考えていた。

メルロ＝ポンティの感性論を解明するには、その哲学的源泉の一つであるフッサールに遡る必要がある。しかし「幾何学の起源」で提示された感性的なものとロゴスとの往還という「ロゴスの生成」（「制度化」Stiftung, institution）の描像には、メルロ＝ポ

ンティとフッサールとで内実に差異が見られる。この差異を取り出した上で、メルロ＝ポンティの思想の特異性を提示することが本稿の目的である。

本稿は以下の行程を取る。第一に、フッサールが制度化（創設、Stiftung）についてまとまった思考を著した「幾何学の起源」、及びメルロ＝ポンティ自身の「幾何学の起源」講義（以下、講義）を参照することで、メルロ＝ポンティとフッサールの差異を明らかにする（第一節）。次に、メルロ＝ポンティの固有性を際立たせる概念として「共-産出 (co-Erzeugung)」という語彙に注目し、その内容を措定する。この時フランスの詩人・劇作家ポール・クロードルを補助線とすることで、メルロ＝ポンティがロゴスの伝達に際し断絶の契機を強く認めていたこと、その上で、破壊を経て再び立ち上がるために依拠していた地点が、普遍的な地盤というよりはむしろ具体的で個別的存在である感性的なものであったことを示す（第二節）。

1. メルロ＝ポンティ「幾何学の起源」講義

1959年から1960年にコレージュ・ド・フランスで行われた「現象学の極限にあるフッサール」講義は、「幾何学の起源」の註解が中心を占めていた⁽³⁾。講義では当時仏訳のなかった「幾何学の起源」を手づから仏訳し分析が行われている。

そもそもフッサールにおける「幾何学の起源」への問いとはどのようなものであったのだろうか。改めて本稿の趣旨に沿う形で概観した上で、メルロ＝ポンティの議論を見ていこう。

ユークリッドからガリレイに至り幾何学は多様な成果を生んできたが、それにもかかわらず幾何学とは一個の伝統をなしている。というのも、幾何学という理念とは最初の幾何学者による「最初の創造活動」によって生まれたものであり、それぞれが次の成果の前提となるような運動によって継承されていくからである。幾何学の起源であるところの最初の幾何学的企図、即ち「原的明証」は、公理や命題といった言語、感性的なものとしての文字資料によって客観化される。幾何学を伝統として継承するには、言語的共同体に属する以後の幾何学者たちがその後の諸成果のうちに初めの原的明証を解明（「再活性化」）する能力を持っている必要がある。無論、実際に論理的

に最初の明証から辿り直すことはできない。しかし伝統が継承されるには、その最初の明証が最新の幾何学の成果にも伝達されており、かつそれを解明する方法自体も成果において伝達されることが必要であるとフッサールは述べる⁽⁴⁾。

この議論は、端緒であり、幾何学という領野の開けとしての「起源の意味」が、感性的諸成果に痕跡として残っており、かつ言語共同体に属する他の幾何学者たちであれば必ずその唯一の起源を復元する能力を持ちうるはずだという前提に基づく。幾何学が高度化し意味の沈殿と空洞化が起こってしまったがゆえにもはや原初明証の再活性化は容易ではないが、その方法を科学者は獲得すべきであるというのがフッサールの立場である。起源は確かに忘却されてしまうが、フッサールはむしろ伝統化における忘却に抗し、「生き生きとした」⁽⁵⁾ものとして受け継ぐことを目していた⁽⁶⁾。沈殿と再活性化からなるフッサールの制度化の議論とは、歴史の上でかつてあったはずの起源を取り戻すための方法論の整備であった。

それではメルロ＝ポンティはどのように論じているだろうか。引用しよう。

伝統とは起源の忘却であり、現在によって所有されてはいないような起源への関係、まさしく、思考によって支配されているのではないからこそ私たちのうちで作用し、幾何学を前進させるような一つの起源への関係である〔…〕この歴史性は、かつて実現されていた領野の開けと、私のうちでのその領野の帰結との相互的なものである⁽⁷⁾。

獲得は喪失（意味空洞化、忘却）だが、また忘却は多産的でもあり、忘却のみが保持を可能にもしている⁽⁸⁾。

ここでメルロ＝ポンティは「伝統」を「起源の忘却」と同一視した上で、むしろ忘却⁽⁹⁾こそが伝統を可能にすると指摘する。しかしながら、この読解はフッサールにおける「幾何学の起源」のかなり特異な解釈であり、メルロ＝ポンティの哲学のフッサールとの差異として指摘できるだろう。というのも、フッサールにおける「危険」⁽¹⁰⁾としての沈殿であり忘却をポジティブなものと捉え返した上で更にそこに伝統の契機

を認めるからである。忘却こそが私たちの内でその意味を保持させ、よりいっそう多くの、多産的意味によって伝統を前進させるという。

フッサールが原的明証の伝達を伝統の条件と捉えていたことに対して、メルロ＝ポンティがむしろ忘却に伝統を認めるのは奇妙である⁽¹¹⁾。メルロ＝ポンティにとって、意味の獲得や伝達を可能にするこの「忘却」とはどのようなものであろうか。フッサールにおいて伝統の継承の役を担っていた「起源の再活性化」は、メルロ＝ポンティにおいては「共-産出」という概念によって書き換えられることになる。

2. 共-産出 (co-Erzeugung) と同時性

生産された意味という成果を理解し、何らかの伝統に連なるものとして捉え返す行為なしには伝統は成立しない。フッサールはそれを理念化の方法と呼び、喪失されることへと警鐘を鳴らしていた。ここでメルロ＝ポンティが編み出したのが、「共-産出」という概念である。

当然だが、フッサールのテキストにこの co-Erzeugung という語は見られず、メルロ＝ポンティが「産出 Erzeugung」に「共に co-」をつけた造語と考えるべきだろう⁽¹²⁾。共-産出は、「幾何学の起源」(Hua IV) 370-371 頁の注釈箇所集中している。当該箇所ではフッサールは、言語共同体に属する正常な人間であれば誰でも、個人の内に現れた明証性を客観的に言表することは可能であり、かつ（「自己移入」という方法を通して）理解可能であること、またそこにおける生き生きとした明証が過ぎ去ってもなお能動的に理解し直すことが可能であることを述べる。ここでフッサールは、人格間、また世代間での隔たりを経てもなお、再活性化を通じた原的明証の伝達を論じる。

このような記述に対してメルロ＝ポンティは次のように述べる。

どうして自己移入や言語共同体はそれ〔明証を伴う理念性：引用者注〕を創設することができるのだろうか？それは（もはや名づけうるものもたらず雰囲気ではなく、言葉の自己所与的作用である）活動的・作動的言葉が、隔たったところから、同じものの共-産出 co-Erzeugung を生じさせ、受動的想起のようにして、以前の行為

ではあるが現在の行為でもある新たな体験を生じさせるのである⁽¹³⁾。

メルロ＝ポンティはフッサールと僅かに立場をずらし、明証の復元を、意味が自らを言語化する作用としての「作動的言葉」がなすものとする。この作動的言葉は、前提として感性的なものの圏域に属するものである⁽¹⁴⁾。そうした自己所与的な言葉が、同じものの「共－産出」を生じさせる。これは言い換えれば、「以前の行為でありながら現在の行為でもある」、すなわちかつて自分自身や他者がなした諸成果の明証の復元を、「新たな体験」として生じさせることになる。また、話を先取りすることとなるが、この「共－産出」が、自己の自己自身の行為また自己の他者への行為の両方へと関係するという点は、引用箇所直前で「同時性 (《simultanéité》)」の二つの型である⁽¹⁵⁾と述べられる。次いで別の箇所では、「本当にそこに共－産出 (co-production) が、あるいは現在の過去に対する合致があるためには、さらに「同時性」、相互内属 Ineinander が必要である […]」⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾と述べられる。

ところで、この共－産出にかかわり括弧付きで挿入される「同時性」を手がかりに、共－産出の内実を照らし出してみよう。メルロ＝ポンティにおける同時性という概念についてはその思想史的源泉が複数指摘されているが、なかでも大きな参照元の一つはフランスの詩人・劇作家ポール・クローデルである⁽¹⁸⁾。「幾何学の起源」講義にはクローデルの名前は挙げられていないが、例えば幾何学の起源講義の翌年1960年におこなわれていた講義「芸術における根本的思考」には次のような記述が見られる。

クローデルの「同時性」とは、空間の諸部分相互、時間の諸部分相互、そして空間から時間へ、時間から空間への地平的な共－現前 (co-présence) のことである。 […] 私はそこ (過去) とここ、(空間的な) そことここにいる。あらゆる時刻において全ての時刻があり、あらゆる季節に全ての季節がある。これは本質や観念への関係によるものではなく、〈存在〉の肉における差異化によるものである⁽¹⁹⁾。

メルロ＝ポンティがクローデルの概念を自身の肉による存在論と強く結びつけて論じていることは注目に値するが、紙幅の都合ここでは立ち入らない。むしろ注目した

いのは、ここで「共 - 現前」と言い換えられる同時性概念が、複数のパースペクティブを総合するという空間的な同時性だけではなく、とりわけ過去を含む時間的・歴史的な凝集が「ここ」において起こる⁽²⁰⁾ものとされている点である。この内容は、メルロ = ポンティが『行動の構造』より晩年まで好んで援用してきた、クローデルの「共 - 出生 (co-naissance)」という概念と強いかわりを持つものである。ここで我々は、「共 - 産出」という概念にクローデルの思想の反響を見出すことによって、フッサールとの分岐点であり、忘却を伝統の条件かつ多産性とみなすメルロ = ポンティの思想の解明の補助線とする。

さて「共 - 出生 co-naissance」とは、connaissance と naissance を合わせたクローデルの造語であるが、これは認識の作用を、認識主体と対象の同時的な生成として捉えるものである。『詩法』によれば、「我々は事物と共 - 出生し、事物を我々との関係において生み出す」⁽²¹⁾。例えば、薔薇の匂いを嗅ぐことは、「その薔薇の匂いを嗅いでいる私を生み出すこと」であり、「この匂いの感覚は、薔薇を嗅ぐ私と、私の感覚に湧き上がり、出現するものとしてのこの薔薇との、生産者 (génératrice) である。この感覚は、同一の客体が同一の点に私を止め、私を限定し、その結果同一の形態、同一の感覚を決定する (...)」⁽²²⁾という。すなわち、薔薇の匂いは、薔薇の匂いを嗅ぐ私と、私の感覚に湧き、さらには匂いのもとである薔薇をも出現させることとなるため、私は恣意的に薔薇の匂いを規定することはできず、むしろ薔薇の匂いという感性的なものによって私と薔薇という対象とは共に生まれ、共に限定される。

この議論をメルロ = ポンティの文脈に再導入し、共 - 産出と照らし合わせてみよう。すなわち、生み出された成果を理解する際に、成果の意味だけでなく、成果を理解する己自身をも産出するような活動が、共 - 産出と呼ばれている。そうだとすれば、忘却が多産的であるのは、忘却の後に改めて対象の意味を捉え返し、かつ主体自身も捉え返されるような産出が行われるからであり、むしろ、産出するためには忘却しないとならないということになる⁽²³⁾。その場合、最初の原的明証としての起源は新たな成果を得るごとに変容を被ることになり、伝統とは忘却を含めた上での一つの起源の創設、原創設となる。すなわち、個々の忘却と産出の一度一度が原創設と一致するような営みの連続しか存在しないことになる。この点こそが、起源を復元することを

志向するフッサールとの最大の差異であり、メルロ＝ポンティ哲学を特徴づけるものである。

だが、それでもなお伝統や歴史といった語が無に帰すことがないのだとすれば、忘却によって断絶を経た起源へと私たちはどのように結びつき、それを何らかの伝統として捉えることができるのか。起源との断絶を克服すべきものと捉えるフッサールは、幾何学の歴史が基づくより普遍的な「歴史のアプリオリ」⁽²⁴⁾を議論の地盤に据え、明証性の継承を原理的に支える。しかしクローデルにならえば、それは「薔薇の匂いという感覚」である。そして、忘却と主体の体験の更新に強調点を置くメルロ＝ポンティもまた、知覚であり作動的言葉という感性的な水準へと定位していただろう。

メルロ＝ポンティはこう述べる。「伝統が常に忘却だとすれば、そこには原創設全体との一致というものがあるだろうか。忘却が多産的な伝統であるように、この一致もまたロゴスの死ではあるまい。」⁽²⁵⁾ここには極めて微妙なメルロ＝ポンティの思想的立場が認められる。彼は、創設された理念性の言語共同体を通した復元はもはや起源と同一ではあり得ず、その都度新たな創設がなされると考えていた。その上で、しかし歴史があり、ロゴスが死んでいないとする。即ち理念性を、具体的な体験や個別の歴史の中に置き直した上で、忘却と、主客双方の生まれ直しを共に語りながら、なおも何か維持されるものがあると考えていた。このことは注目に値するだろう。先にも見たように、原創設としての共－産出に関係するのは本質や観念といった従来の哲学的概念ではなく、「〈存在〉の肉における差異化」なのであった。ここで肉について詳細に論じる余裕はないが、この「ロゴス」は、個々の身体や言語・文化的状況において取り上げ直されるものであり、より踏み込んでいえば誤謬をも貫いて生き延びる何かであると捉えることができるだろう。

結論

本稿で見たように、メルロ＝ポンティは伝達される理念性を沈殿と言い換えた上で、歴史を可能にするものは忘却と「共－産出」であると捉えていた。共－産出とは、既存の成果の理解が過去に設立された意味の反復ではなくその都度の捉え返しであるこ

と、さらにそれが個人的な生まれ直しでありながら、対象の意味をも変えていくものでもあった。これは、相互主観的に意味を伝達し歴史を紡ぐにおいて積極的に断絶を認め、それを取り込んでいくというメルロ = ポンティ固有の歴史観であり、フッサールとの最大の差異の一つであろう。

その上で継承される意味とは一体どのようなものだろうか。少なくともそれは、復元すべき原初の何かではなく、繰り返し忘却されその度ごとに新たに創設されるというダイナミズムの中でなお「死んでいない」ものである。メルロ = ポンティにおけるロゴスとは、産出された成果を理解するに際し主体自身を改めて産み直すようなロゴスであり、かつ、新たな産出によって以前の産出をも塗り替えてしまうようなものである。メルロ = ポンティが感性的なものの機能としての言語の作動性や感性的経験に比重を置くことによってロゴスの改鑄を試みていたことを指摘し、結論とする。

註

- (1) *Notes des cours au Collège de France, 1958-1959 et 1960-1961*, Gallimard, 1996, p. 39. 以下、NCと略記。
- (2) Jocelyn Benoist, « Rompre le silence de la phénoménologie », *Levinas et Merleau-Ponty*, Hermann, 2024, pp. 259-270.
- (3) フッサールによる「幾何学の起源」の注釈と仏訳、ハイデガー「言葉への途上」の冒頭論文「言葉」の読解と仏訳、そしてフッサール「現方舟としての地球は動かない」の分析の三つから構成されるが、大部分は幾何学の起源の分析に充てられている。なお同時期には「自然とロゴス」と題された講義が続いており、晩年の講義の主題であった哲学の可能性や存在論の改鑄、「存在の到来」(NC p.148)の問いがここで深められている。
- (4) 「幾何学の起源」の別の論点については亀井大輔「『フッサール『幾何学の起源』講義——デリダの読解との対比を通じて』『メルロ = ポンティ読本』法政大学、2018年、300-209頁を参照されたい。
- (5) E. フッサール『ヨーロッパ初学の危機と超越論的現象学』（細谷恒夫、木田元訳、中公文庫、1995年、以下『危機』）519頁。Husserliana, Bd. IV, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, Martinus Nijhoff, 1954, p. 379. 以下、Hua IVと略記。
- (6) 例えば次の記述を参照。「精神的所産が永続的な言語上の獲得物へと不可避的に沈殿して

いき、この獲得物は差し当たっては受動的に受け入れられ、任意の他者によって受け継がれうるわけであるから、ここでは連想的形成作用は不断の危険であり続ける」(『危機』506頁 / Hua IV p.372) フッサールが、沈殿した意味の論理的操作にとどまらず、明証性を有した所産として伝統を継承することを重視していたことは明らかであろう。

(7) *Notes de cours sur L'origine de la géométrie de Husserl, suivi de Recherches sur la phénoménologie de Merleau-Ponty*, Presses Universitaires de France, 1998, p. 40. (メルロ = ポンティ『フッサール「幾何学の起源」講義 付・メルロ = ポンティ現象学の現在』(加賀野井秀一、伊藤泰雄、本郷均訳)、法政大学、2005年、30頁) 以下 NCOG と略記、仏語版を p. nn、邦訳を nn 頁と記載。

(8) NCOG, p. 37/ 48 頁。

(9) 1954-1955年にコレージュドフランスで行われた「制度化」講義を經由しメルロ = ポンティの「忘却」をハイデガーの〈存在〉の忘却と照応させ論じた先行研究として、川瀬智之『メルロ = ポンティの美学 芸術と同時性』(青弓社、2019年)がある。〈存在〉へと議論を展開していく上で重要な論点を含むが、「幾何学の起源」講義の範囲ではその意味はより制限して理解することが可能であると考えられる。

(10) 『危機』506頁 (Hua IV p. 372)。

(11) その理由は、一つには、その意味が文化的既得物として手持ちの、自由にできるものとなっていては思考の材料にできないという発想があった (NCOG, p. 29/38 頁)。この点については本稿では触れないが、言語の意味生成における沈殿の意義については、三宅「後期メルロ = ポンティにおける「沈黙」の位相」『メルロ = ポンティ研究』2019年を参照されたい。

(12) この語は「制度化」講義では登場せず、以降の講義草稿等でも見られない。この概念は、「肉」によるスタイルと存在論の練り上げに際し別の語彙で書き換えられていったと推測される。

(13) NCOG, p. 71/56 頁。

(14) 詳細な検討はここではできないが、引用中の「受動的想起」もまた、「身体、実存範疇としての過去を知覚する器官としての感性的なもの…受動的過去は「感じるべきもの」として与えられるのである」(NCOG, p.51/65 頁) という記述を踏まえると、感性的なものが先導する仕方になされることができると考えることができる。

(15) *Ibid.*

(16) 相互内属 *Ineinander* とは、「意味が作られることと意味の沈殿とが共存し錯綜する〔*Ineinander*〕生き生きとした運動」(『起源』292頁 / Hua IV p. 380) としての歴史を記述する際にフッサールが用いる語で、メルロ = ポンティが好んで借用するものである。

(17) NCOG, p. 90/69-70 頁。

(18) メルロ = ポンティは『行動の構造』や『知覚の現象学』以降、最晩年の講義に至るまでクロー

デルを読んでいた。Saint-Aubert, *Du lien des êtres aux éléments de l'être: Merleau-Ponty au tournant des années 1945-1951*, Vrin, 2004, また加國尚志「共同出生と同時性——メルロ = ポンティの哲学におけるクローデル文学の受容をめぐる一考察」(『姫路人間学研究』第二巻第一号、1999年)を参照。

(19) NC, p. 244/200 頁。

(20) その二段落前には、「見える有限な諸領野の重なり合い、肉的な共存、共 - 持続 (co-durée) による同時性」という表現が見られており、主体において空間的、時間的に同時的であるだけでなく、持続である他の主体とも同時的であるという自他の同時性が語られる。それゆえこの議論は、間主観性の創出と伝統の継承へと接続される可能性を持つのである。

(21) Claudel, *Ceuvre Poétique*, Gallimard, 1967, p.176. (『世界文学体系 <51>』齋藤磯雄訳、筑摩書房、1960年、191頁。)

(22) *Ibid.*

(23) 伝達されるものが変化を被るという動的な性質に言及した先行研究として Larison が挙げられるが、彼女はその変化の理由を「偶然性」とする。しかし、忘却は偶然性によるものではなく原理的なものであり、ロゴスの残存と共 - 産出、忘却を共に論じるメルロ = ポンティの緊張関係を適切に拾うことができていない。それゆえ Larison の解釈はメルロ = ポンティの歴史の生成のダイナミズムや多産性を過小評価している。Vers une nouvelle phénoménologie de l'institution : avec et au-delà de Merleau-Ponty, Zeta Books, 2023.

(24) 『危機』534頁 (Hua IV p. 386) など。

(25) NCOG, p. 40/30 頁。